

▼被災地からの現場レポート（メールで寄せられた先生の声）

東北地方の学校の先生方に協力いただき、被災地では今どうなっているのかについて、地震発生後の現場を見た理科や社会科の先生か寄せられたレポートを紹介いたします。生々しい現状が分かる貴重な報告であり、これからの教育についての考察もあって、とても有意義な内容です。

レポートを寄せていただいたのは、岩手県北上市立北上北中学校副校長の高橋治先生、岩手大学教育学部附属中学校教諭の坂本有希先生、福島県立原町高校教諭の渋谷慎司先生です。

高橋先生は、2回もレポートを寄せていただきました。どの先生の報告も、現場を見たからこそ語れる内容です。ぜひ、熟読していただければと思います。

- 岩手県北上市立北上北中学校 高橋治副校長からの報告 P1～
- 岩手大学教育学部附属中学校 坂本有希教諭からの報告 P8～
- 福島県立原町高等学校（南相馬市） 渋谷慎司教諭からの報告 P11～

<被災地の先生からの報告>

座談会「東日本大震災と理科教育」への手紙1（4月2日）

岩手県北上市立北上北中学校

副校長 高橋 治

1 どれほどの地震・津波だったのか？

正直まとめ切れません。今回の地震・津波の特徴の1つが「広範囲にわたること」だと思います。3月31日、半日かけて岩手県の陸前高田市と大船渡市を回ってきました。特に陸前高田は海岸から相当離れたところまで、報道によれば海岸から1.5kmのところまで（例えば生徒に地図上に直径1.5kmの円を書かせるとその広範囲さに気づいてもらえ

ると思います。)、津波が襲い、高さは 20m だとのこと。20m とは何階建てのビルに相当するのでしょうか？他方、被災した大船渡のいとは、大船渡の津波の高さは 10m 程度だったようだと話していました（この 2 つの市は隣接しています）。

三陸海岸はリアス式海岸でその海岸の形状により被害には大きな差があるのだなど、実際に見ても感じました（4月1日のニュースでも、大船渡市中心部の津波は 10m 前後ですが、市内でも綾里の湾では 20m の津波だったこと、町中心部の浸水率は陸前高田で 36%、大船渡 30% との報道がありました。）

また、被災者の思いも相当に違うのだらうと思います。特にリアス式海岸はデコボコしていて、少し内陸に向かうだけでかなり海面から高くなる場所も多いです。わずかな海岸からの距離の差が被害の状況・生死を大きく分けています。そのため、同じ陸前高田市の同じ学校の生徒の中でも「建物全壊家族全員行方不明」、「建物全壊で両親が行方不明」、「高台の学校にいた子どもだけが無事」「家は無傷全員無事だが、水道電気携帯電話などがだめで物資に窮している」（3月31日の報道では、避難所に対してそのように現在家にいる人への物資をどのようにするのが話題になっていました）など、さまざまな状況があります。

まとめていえることは、

- 1 未曾有の大災害であった（チリ地震津波の経験のある住民であっても想定をはるかに超える規模であった）
- 2 被害の状況はまとめきれない（広範囲なこと、地形により被害の状況には大きな差があること）
- 3 被災者の心理にも大きな差がある

という、なんともはがゆい状況が現在だと思います。

2 津波を被災者はどう感じていたのか？

以下、私の親戚の話です。

これが一般的な方々の感覚だらうと思いますので、丁寧に書きます。（大船渡で家が半壊したおじ、叔母に聞いてきました。叔父の店は、海岸から 500m 程度離れていて、海拔 7～8m というところだと思います。）

地震が起こったとき、叔父は自営のクリーニング店にいました。叔母は自家用車で配達をしていました。車でも分かる激しい横揺れ、店でも大きな揺れがあり叔父はテレビが倒

れないように揺れの間中テレビを押さえていたそうです。

地震から約 10 分後叔母が店に戻ると、地元の消防団が周囲を消防自動車巡回し、「津波が来るので避難するように」と、至る所を走っていたそうです。二人とも気が動転しているものの、チリ地震津波のときに道路を隔てた 3 m ほど低い場所にあるお店の床までが津波が着た場所という経験から、まさか自分の家は大丈夫だろうとそのまま店にいたようです。

ただ、そのときすでに停電していたか、水道は止まっていたのかは分からないとのこと。さらに防災のサイレンは鳴ったかと聞いても覚えていないとのこと。ガスの元栓をきちんととめたのは唯一覚えていました。

さらに、5 分ほどして店の前を出ていた隣家のいところが津波が来たのを発見し、言われて二人とも道路に出たそうです。

(地震から体感では 20 分後)、「初めに茶色の土煙のようなものが見え」て、その後「茶色い水が迫ってきた」ので、その上り坂になっている道路を上に向かって逃げたとのこと。津波の音というのはほとんどなかったそうです。津波は店の 1 階の高さ 2.0m 付近まで達し、2 階は無傷で残りました。

もし、いところが「津波が来た」と言わず、夜で津波が来るのが見えなかったら逃げたか？と聞いたら、「逃げなかったと思う」と叔父は言っていました。

私も同じ状況なら、津波が来ても上り坂の途中にあるあの店までは来ないだろうと思っただろうと思います。

・津波はどのように警戒していたのか→大船渡でも陸前高田でも十分に警戒しています。

訓練も十分で、当然水門も速やかに閉めましたし、消防も迅速に動いたはず。 (陸前高田に住んでいた時代、恒例行事のように行われる消防団の訓練を見ました)。警報も万全でした。ただし、今回の場合は停電で鳴らなかった可能性があります。

・この規模の津波は予知していなかったのか→チリ地震津波が基準になっていたようです。

私自身なのとなくそんな認識になっていました (街のあちこちに、チリ地震津波のときにはここまで水が来たというのが張ってもあります。それが年配者ほど自然にしみついていっているのではなかったでしょうか。)。地震が来たら、次に津波が来るというのはほとんどの人が思っています。

・被害を大きくした原因は、ハードとソフト→被災者の常識と今回の震災のずれは

私は2つ大きくあったように思います。

1つは、**予想(チリ地震津波の経験をもとにした)をはるかに超える大きな津波**であったこと。

もう1つは、先日の報道に、よれば場所によっては、1、2回目ではなく**3回目の津波が最も大きく**、家に戻ろうとして波にさらわれた人もいたとのこと。

この2つは、大きいと思います。

10mを超える堤防を延々と築いていた町がありましたが、それをあっさりと越えました。世界中から視察が来るほどの大堤防でも防げなかったとすると、**被害を押さえるハードとはないのかもしれない**と思います。

3 被災した子どもに何をどう教えればよいのか？

1つは、今回の**地震と津波を正確に分析し、時間の経過を追って何が起こったのかを伝えること**だろうと思います。理科を教えている私ですら、あんな大津波が音を立てないことや、波としてではなく水位が上がるようにやってくること、3回目の津波が最も大きくなった場所のあること、地形によりこんなに被害に差があることなど、分かっているようで分かっていたいなかったと思い知らされました。きちんと伝えることが、科学的な行動をする上でも基盤となるのかなと思います。

4 災害を教えることは心のケアと相反しないのか？

相当難しいと思います。前半の通り、同じ学校の児童・生徒でも被災の状況は大きく異なります。それを**一律に指導することは相当に難しい**と思います。実際、4月4日に私の学校にも1人転校生があります。仙台から引っ越してくる被災した生徒のようです。

その点、**東北から大きく離れた方々は、速やかに教えることは大きな意味を持つ**のかもしれませんが。

座談会「東日本大災害に学ぶ理科教育」への手紙 2

岩手県北上市立北上北中学校

副校長 高橋 治

はじめにーまずは感謝

まずは日本各地の皆さんに感謝を申し上げたいと思います。政府の対応がどうしたとか、そういう難しいことはよく分かりませんが、実際多くの方に支援していただいたと思います。

3月31日、内陸部から陸前高田に向かう途中たくさんの自衛隊の車両にすれ違いました（数千台のうち約1割が自衛隊といった感覚です）。また、2割が支援のための自動車およびタンクローリー、トラックといった感じでした。岡山医大と書いた車とか京都ナンバーの飲料水を積んだトラックなどを見ました。



東北人の気質なのかもしれませんが、「もっと、こうして支援してくれてもいいだろう！」というような被災者はおそらくほとんどいないだろうと思います。

現在多くが、「こんなにさせていただいて申し訳ない」「何とお礼をしていいのやら」という感覚だと思います。

最近、岩手県内のコンビニに「がんばろう岩手」と張り紙がされるようになったり、「復旧定食特別価格 500 円」などというのが見られるようになりましたが、どこか売名行為のようで私はあまり好きではありません。

上の写真は、内陸部と沿岸部を結ぶ幹線道路の中間地点の山の中の小さな家の前に、沿岸部から内陸部に戻る方向に、多分土地の所有者がいてもたってもいられず手書きで書かれたろう看板です。「**ご支援ありがとうございます**」。これが、被災者の隣人としての岩手県人の素直な気持ちだと思います。私も少し胸が熱くなるとともに、同じ岩手県人としてこの感覚を誇らしくも感じました。

1 被災者に今後、何が必要なのか

被災の直後必要だったのは、食糧、水、暖をとるためのストーブと石油、電気だったと思います。現在必要なのは被災者が立ち上がるためのものだろうと思います。最愛の人を失い、まだ気持ちの整理もつかない人も多いと思いますが、多くは立ち上がりたいたいと思いはじめていますし、立ち上がらなければなりません。

そのために今後被災者に必要なものは、私は「生きがい」だろうと思います。

避難所で避難物資をもらい、支援をしていただき、時間を過ごしていくのを、東北人は「申し訳なく、歯がゆく感じている」と思います。

自分自身で何かしたい、自分自身で社会のためになりたい、と思いはじめていると思います。それは、パン屋さんはパンを焼くこと、漁家は漁をすること、学生は学校に通って勉強すること、そして、クリーニング屋さんはアイロンをかけること、なのだと思います。そのためのパンを焼く機械、学校、船と網、そして働く職場の整備が今後必要なのだと思います。

つまり、ただ**受け取るだけの支援**から、支援することで支援した人にも跳ね返りがある**相互の支援**のようなものが今後望まれると思います（東北人の気質からも、いただくだけの支援は「申し訳ない」「心苦しい」という感覚が強いですので）。

私事ですが、ふさぎこんでいた 80 歳近い叔父は、ようやくここにきて、クリーニング屋の店を一度壊して建て替え、機械を修理してやり直すことにしたようです。しかし、そのような再建がいたるところで起こるわけです。着工は半年後か 1 年後か、それまでは内陸のアパートで時を過ごすことになりそうです。

2 科学は、理科教育は、何ができるか

今回の大震災で、科学が無力だったとは思いません。

科学的知識があったから逃げ切れた人は少なくありません。それ以上に、科学の恩恵により、医療技術の進歩で大けがでも助かった人もたくさんいますし、がれきを片付ける重機、孤立した集落の発見も科学のたまものではなかったかと思います。ただ地震の予知とか、電気に頼った防災システムとかいうのは改善の必要があると思います。

今回、関東などでは、電池・インスタント食品・ガソリン等の買いだめが起こったとも聞きました。岩手のガソリン不足は深刻で、ガソリンがないために家族の安否確認にいけないという人がたくさん出ました。そのため、北上でも 11 時間並んでようやくガソリンを

20 リットル買ったり、それを 2 軒回って地震から一週間後によく宮古に行けたという
ような状態です。

また、地震の翌日には福島から 300 k m も離れた岩手でさえ、「雨の日は、雨に当たらない
ようにしないと放射能が心配」と学校の先生が真剣に心配していました。

釈迦に説法ですが、古代、理科は哲学から派生したもの、とすればその科学的考え方は
哲学にも通じる。**正しいことと正しくないことを見分けることが究極は目指すもの**なのか
もしれないと思います。

具体的にいえばそれは「**科学的な判断力**」。「**事実を見極め、検証し、積み重ね、それら
をもとに、客観的な考察をし、判断し、さらに検証する**」。そのプロセスを経験させ身に着
けさせることが必要かと思います。

もう 1 つは、「**科学的知識**」。これまで、**人類が積み重ねた英知を学ぶこと**も大切だと思
います。地震のメカニズムも津波のメカニズムも知っていたからこそ、避難できた人も多
くありました。先人の知恵を学ぶことも大切だと思います。今回の大震災で何が起こった
のか整理がついて、そこから正しく学ぶということは重要だろうと思います（阪神・淡路
大震災のときにも情報は出されたわけですが、それが小学生中学生向けには十分整理まで
されていなかったようにも感じます。もしかしたら、岩手までは届かなかっただけかもし
れません）。（4月1日）

座談会「東日本大震災と理科教育」への手紙(3月 31 日)

岩手大学教育学部附属中学校

教諭 坂 本 有 希

どれほどの大きな地震・津波だったのか

どれほど大きな津波だったかは、報道されているような東京ドーム何個分の水とか、ジャンボジェット機何台分が衝突するエネルギーと説明された方がイメージしやすいかもしれません。

また、テレビで放映されていたように、巨大な防波堤や防潮林、車や家屋はいとも簡単に流され、破壊されるようなパワーです。岩手県大船渡市三陸町越喜来（おきらい）にある私の実家から見える風景はすっかり変わってしまいました。津波後、国土地理院のサイトに掲載されていた衛星写真を見たとき、その変化に驚きを隠せなかったのですが、実際にこの目で見た故郷はあまりにも変わっていました。

実家から海までの距離が近くなってしまったのです。津波は、地形まで変えてしまいました。田んぼの土が運ばれ、抉られ、海水が以前より浸水するようになったのです。私の母は、台風でも来れば、高波で家まで海水が来てしまうのではないかと心配するようになりました。

明治 29 年の三陸津波より大きい

少しだけ客観的に分析したいと思います。

今回の津波は、明治 29 年の三陸津波と同程度の大きさかそれよりやや大きいと考えられます。私の祖母によれば、明治 29 年の津波の際には、浸水はしなかったものの私の実家まで海水が届いたそうです。今回の津波も私の実家まであと 30 c m のところまで到達したそうです。

昭和 8 年の三陸津波が実家を下がったところにある我が家の畑まで、昭和 35 年のチリ地震津波が畑より標高の低い越喜来小学校の校庭まで到達したそうです。(後で触れますが、今回の津波は 3 階建ての越喜来小学校をのみ込み、小学校は全壊となりました。)

今回の津波は、明治の時にはなかった防波堤を乗り越え、防潮林をなぎ倒し、三陸鉄道の線路をのせる盛り土を通過して、私の実家に到達しようとしたので、明治の津波よりは大きかったかもしれません。

いま、被災地の人はどういう気持ちでいるか

私は地震・津波が起こった5日後の3月16日に現地に行くことができました。

家族の無事が確認できたのが3月15日。小中学時代の友人からの電話でした。その友人は愛知県に出稼ぎに行っていたのですが、飛行機で愛知から秋田に飛び、秋田からレンタカーで実家の越喜来へ。気を利かせて私の実家にも行ってくれたのでした。無事の知らせを聞いても、実際に家族に会うまでは不安でした。

3月15日は、雪が降る寒い日でした。幸い津波の影響を受けなかった実家で、父母、祖父母の4人が練炭のこたつで暖をとっていました。家族は私の突然の訪問に驚き、すぐに喜んでくれました。

祖父母は、3回目の津波の経験になります。昭和8年の津波は夜が明ける前、チリ地震津波は今回に比べると大きくない。今回のような大津波を見たのは祖父母も初めてだったようです。必死に逃げたこと、津波が遡り家屋をどんどん流したこと、引き波の破壊力等々、祖母は、そのすごさを2時間ほど一方的に私に話しました。

地域コミュニティはしっかりと

壊滅的な被害を受け、これからどのように復興していくのか先が見えない状況の中で、私は一つ安心して帰ってきました。私の家族は、地域に住む方々の安否をほとんど知っていました。母親は避難所に炊き出しに行っていました。父親は浸水被害にあった家の修理に出かけていました。私の育った地域のコミュニティがしっかりしていることが分かりました。「必ず復興できる」と実感してきました。

3月31日現在、私の実家では電気が復旧していません。風呂、洗濯機、冷蔵庫など電気を使うものに囲まれていました。テレビがなく情報がない、ラジオの電池もなくなってしまった。真っ暗闇、他との交流ができないのは相当のストレスのようです。

津波はどのように警戒していたのか

岩手県大船渡市では、これまでの津波被害を元にハザードマップを作成しておりました。そのマップを見ると、やはり今回の津波は明治の三陸津波と同程度の浸水と考えられます。また、国道には津波浸水区域という青い標識がありますが、陸前高田市も大船渡市もその標識のあたりまで津波が到達したようです。過去の最大級の明治の津波からの想定が合っていたと思います。

東北地方太平洋沖地震の2日前の3月9日、前兆と思われる地震がありました。岩手日報（地方新聞）に掲載されていましたが、その時越喜来小学校では校舎外の高台にある三陸駅に避難しています。このときも迅速な行動だったようですが、3月11日には地震が収まらないうちに避難をはじめたようです。2日前と同じく三陸駅まで避難したところ津波が迫ってきたので、さらに高台の南区公民館まで避難したそうです。管理職の的確な判断があったからこそ、この地域に避難の意識があったからこそ、助かったと思います。

もう一つ、数日前の朝日新聞に掲載されましたが、越喜来小学校の児童の避難には、避難路の建設が役立ったようです。この3月になくなった大船渡市の市議会議員が、津波の来たときのための避難経路として、校舎の2階から直接三陸駅への道路へとつなぐ避難路を作ったのだそうです。議員の鏡だと思います。

予想はしていたが予知はできない

地震や津波の予知はできるのでしょうか。今回の余震で、緊急地震速報のあたる確率は（どれだけあるのでしょうか）？ 「そろそろ大きな地震が来る」とは、小学生の頃から、宮城県沖地震があると言われ続けてきました。予想はしていたと思います。だから、ハザードマップも存在していたと思います。

津波について波高がいくらかという報道が目立ちますが、波高は評価にはならないと思っています。単純にその高さの防波堤を作っても防ぐのは難しいと思いました。津波の水量はいくらなのか。これがポイントだと思います。

座談会「東日本大震災と理科教育」に寄せて(4月1日)

津波・原発で、自主避難した高校で

福島県立原町高等学校教諭 (南相馬市) 渋谷慎司

被災現地からの情報をいくつかお伝えします。

私は太平洋岸に位置する福島県南相馬市に所在する高校に勤めている社会科教諭です。この場所は福島第一原発から30km圏内で屋内退避区域、自主避難を促す区域とされており、地震、津波、原発事故にさらされ続ける現状にあります。

理科室の大机も動き、薬品の処理も

地震当日の学校は授業中でしたが、非常に長く激しい横揺れが続き、生徒たちは机下にもぐり込みました。

天井パネルはあちこちではがれ落ち、蛍光灯は台座ごと外れ、額縁などが落下、それだけでも十分危険な状態でした。職員室は本棚や机上の書類が全て飛び回り、引き出しもガンガンと開き、パソコンのキーボード上に落ちた書籍類の圧力でピーピーという操作音が不気味に鳴り止まぬ騒然とした有様でした。耐震補強工事が未だ行われていない箇所が多い古い学校なので、はがれ落ちた体育館外壁が用具室の直上に突き刺さり、もし体育の授業中や部活動中であれば即死者が出ていただろう状況もありました。

地震直後の保守点検作業に携わった関係で、畑違いではありますが、理科室の様子も見ました。

生物室、化学室、物理室に多くある大棚は倒れるか大きく移動しており、中身のガラス類は床に飛び散り割れて危険な状態でした。水道とガスが接続され動かぬように床面に固定されている大きくて重い机が、ずれて動き回ったような姿にもびっくりさせられました。大きな余震が2回3回と連続し校舎倒壊まで想定される中で、倒れて割れた薬品類のうち特に危険な物は、異臭の中で理科の先生方が必死に処置をしていました。

余震の度に生徒を外に

その後、事務室のテレビニュースで、私の住所でもある相馬市の港で7.3mの津波という報道と、よく買い物に出かける名取市を飲み込んでいく津波の映像とを見て、気が遠くなる感じがしました。

生徒たちは、日頃の訓練通り緊急放送に従い、校庭に避難。学校の標高は 15m 程度あるので津波は想定がなく、校舎倒壊の危険から生徒を守る避難です。繰り返す余震で待機が続き、30 分しても余震は止まず、一部の生徒の保護者が生徒を迎えに来始め、雪がちらつき寒さも募ってきたため、余震の合間に少人数ずつ荷物を取りに校内へ生徒を入れる決断をしました。その後は余震が起きると大声で生徒を校外に出すことの繰り返しです。

ようやく一段落ついて今度は職員の番です。地震による土砂崩れと津波で幹線道路が寸断され、南北への帰宅が不可能という情報が伝わってきました。電車も不通になり、迎えの連絡もつかず帰れない生徒たちは同窓会館で待機させることにしたので、あわせて職員も着のみ着で泊ることになりました。

避難所と死体安置所に

私はその後、通行可能な道路情報が入ったため、自宅に戻れましたが、翌日からは原発事故の報が入り、出勤不要という形になりました。

学校はそのまま地域の避難所と死体安置所を兼ねることとなり、それは近隣どこの学校でも同様でした。未来を語るはずの場が、苦しみと悲しみの蔓延する所となってしまったのです。

また、自宅は海岸より 5 km にありますが、高架橋に上がると今までは見えなかった海が目に入るようになり、地形を激変させる地震のエネルギーの凄まじさに、まるで顔面を殴られるような衝撃を受けました。

私の住む相馬市は原発から 40～50km の比較的安全圏にあたります。しかし福島第一原発 1 号機に続く 3 号機の建屋爆発を知り、大事をとって妻の実家の会津若松(原発から約 100km の距離)に家族とともに移動。さらに続く放射性物質拡散をみて、北海道の叔母宅へ避難しました。

家族、生徒も県外避難へー放射能チェックが前提に？

その避難過程で、一点憂うべき問題にぶつかりました。一時、会津若松に避難しましたが、北海道に再避難するにあたり、風邪気味の二女（1 歳）を小児科に連れて行った 3 月 15 日のことです。浜通り（福島県の太平洋岸）からの受診者は、放射能スクリーニングを受けてからでないと診察しませんと断られたのです。

私たちは 14 日の時点で原発から 45km 程の自宅を離れていたし、まだ 20km の避難区域し

か設定されていない被害最小と思われるときです。いぶかしく思いながらも、娘のためと放射能スクリーニング会場の会津大学へ向かうと、込み合っていて当日予約は終了という。翌日はもうフェリーなので諦めて市販薬で済ませることにしました。広島 of 被曝者差別が思い出されたり、政府発表よりも放射線被害は深刻に拡大しているのかもと思ったり、フェリーや北海道で拒否されたらどうしようと不安になったりと、重く考えさせられる一件でした。

このような状況下で、生徒たちもほぼすべて県内外へ避難しました。北は北海道、南は兵庫という連絡が入っており、そうした意味でも4月1日現在、学校再開の目途は全く立っていません。この学校は地域の進学校ですので、大学受験に向けた学習の遅れが懸念されますが、他県他校への緊急の転校等の措置しかないだろうと思われます。震災後初めて招集され、24日ぶりに出勤する4月4日の職員会議で校長の見解が示されるのでしょうか。

「東日本巨大地震の災害と理科教育」について考えました。

I 地震について

地震に強い町づくりに役立つような基礎知識を得る学習が求められると思います。地震の仕組み、その影響力、耐震建築の物理的構造、余震による二次被害についてなどでしょうか。

今回は本震もさることながら余震も震度6が繰り返し、しかもそれぞれが2～3分の長きにわたりました。私は宮城県沖地震の震度6を体験しましたが、今回は明らかにそれ以上の余震がありました。そうした中で、生徒を校舎に戻して帰り支度をさせることは一種の賭けのような感じでした。もしかしたら余震で倒壊するかも知れません。余震の周期のようなものがあるのならば、その知識を持ってもう少し冷静に生徒を誘導できたかも知れません。

II 津波について

リアス式海岸の津波は怖いという一般知識はありました。しかし、平坦な海岸線が続く福島県では、津波に対する備えは、かなり少なかったはずで、津波対策の訓練も皆無でしょう。その証拠に、地震が起きた後に、普段通りの仕事に戻ってしまったり、職場から家の様子を見に行ってしまうと、津波の被害にあった話をいくつか聞きました。

津波の仕組み、その影響力、対津波建築や町づくりや避難路の望ましい姿などを生徒に学ばせたいと思います。

Ⅲ 原発と放射線被害について

放射線被害に関するどんな基準値を、何千倍何万倍上回っても「安全」「安全」と言い続ける東京電力や国の姿勢は、教育的ではありません。大人がそれに猜疑心をもって接す中では、何も信じない子どもが育つでしょう。

国の安全基準は、体外被曝に対するものが中心で、最も深刻な体内被曝から目を背けるものだという専門家の指摘も目にしました。

安全基準とは何か。その安全基準は何に対するもので、問題点と確かに正対するものなのかどうかを検証させるような調べ学習をさせたいです。

また、他国が進めた避難区域 80km と日本の 20km の差はどこから来るのか。飯舘村は安全という国と、避難規制値の 2 倍で危険だという I A E A の違いは何なのか。I A E A は間違っているのか。**安全と言いながら、屋内退避や摂取制限、出荷制限をかけるのはなぜか。**なども学習の切り口としては良いと思います。

さらに大人と子どもの放射線障害の事例なども、こどもには興味深いところだし、ウィンズケール、スリーマイル、チェルノブイリ、東海村などのデータを、現在の福島原発事故にあてはめることも有効でしょう。そして、ひとたび暴走し始めた原発をどんな風にとのくらの期間や人手や費用をかけて、抑えていくのかという事実を生徒たちに追いかせながら、**今後の原発との付き合い方を見つめさせていきたい**ところです。

私は理科教員ではありませんので、その部分の専門知識がありません。**今後は小中高の被災地在籍の理科の先生方にもいろいろとお聞きして、また有効な情報を寄せていきたいと考えています。**複数の知人も亡くなりました。放射性物質の陰におびえながら暮らす仲間や子どもたちがいます。私の教育者としての責務はかなり重要です。まだ行方が分からない方々のためにも頑張らなければと思っています。皆様方のさまざまなお知恵も必要です。

ぜひ私も座談会に参加して知見を広げたいのですが、残念ながら時間的・物理的余裕がありません。皆様方の実りある議論に期待いたしますとともに、広く情報発信をされて、全ての方々が正しく前進できるきっかけとなりますことを強く祈念致します。(4月1日記す)